volume 112

変わる日本の「暮らし」と「まち」

炭鉱のまちの競馬場跡に生まれる世界に類を見ないスマートシティ

熊本県荒尾市
あらお海陽スマートタウン
2016年●平成28年～

阿部民子 text by Tamiko Abe
illustration by Shigeyuki Sakata

熊本県の西北端に位置する荒尾市。かつては炭鉱を擁するまちとして栄え、その偉功は世界文化遺産となった万田坑の姿からうかがい知ることができる。

当時、炭鉱で働く人たちの大きな娯楽となったのが、競馬だ。まちの中心地にあった荒尾競馬場は、スタンドから有明海や遠くに雲仙普賢岳を望む風光明媚な競馬場として知られ、多くの人でにぎわった。

そんなにぎわいも、1997（平成9）年の炭鉱閉山とともに衰退。荒尾競馬場も2012年、83年の歴史を閉じることになった。

そして現在、その競馬場跡地で新たなまちづくりが進められている。世界が注目する、まちの姿を追った。

○土地を集約し、まちの基盤を作る

JR鹿児島本線荒尾駅から徒歩約5分の場所にある荒尾競馬場跡地。かつてのトラックやスタンド、厩舎や職員宿舎などに、周辺の住宅地を合わせた約35ヘクタールの「あらお海陽スマートタウン」が、新たなまちの舞台だ。

荒尾市の中心地に生まれた広大な空閑地をどう活用すべきか…市は、炭鉱閉山による人口減少や、競馬場廃止によって失われたにぎわいを取り戻す起爆剤とするべく、有識者からなる検討委員会のほか、市民アンケートやヒアリングを実施し、新たなまちの姿を模索し始めた。

それと同時に進められたのが、土地区画整理事業だ。地権者の数は150人。そのまま住み続けたい人、土地を売りたい人、土地を貸したい人と意向もばらばらだった。

地権者の合意を得て、速やかに事業を進めるためにはどうしたらいいか…市が相談を持ちかけたのが、まちづくりに精通しているUR都市機構だった。両者は、2016年に土地区画整理事業に係る事業推進支援等の基本協定を締結。土地区画整理事業の施行者である市をURが支援する形でスタートした。

UR荒尾都市再生事務所事業課長の谷本知士は「地権者お一人おひとりの意向を何度もお聞きし、不安が解消できるようていねいに対応させていただきました」と事業当初の様子を語る。

市とURの地権者との話し合いの結果、意向に沿った形での土地の集約化は進み、道路や宅地などの新しいまちの基盤も順次完成。現在は新しいまちにも住宅が建ち、人々の営みも始まっている。

○住む人訪れる人が幸せになるまち

まっさらな広大な土地に、新たに出現するまち。その概要を、荒尾市都市計画課長の末永淳一さんに聞いた。

「コンセプトは『有明海の夕陽が照らすウェルネスタウンあらお』。ウェルネスとは、体の健康だけでなく、心の健康、そして社会など、人を取り巻くすべての環境的なものを含む、健康の拡張概念です。誰もが暮らしやすく、ワンランク上のライフスタイルが実現できるまちを目指します」

市の計画に弾みをつけたのが、2015年に決まった、熊本から佐賀までをつなぐ有明海沿岸道路の延伸と、地区内の荒尾北IC（仮称）の新設だ。IC最寄りに荒尾市初の「道の駅」に保健・福祉・子育て支援施設を複合的に整備し、そこを核として周辺の温浴施設などと連携するのが、市が描く将来イメージだ。

道の駅で地元の新鮮な食材の買い物や食事を楽しみ、芝生広場などで子どもと遊び、ウォーキングやサイクリングで気持ちよい汗を流し、有明海の夕日を見ながらゆったりと温泉に浸かる…地域の人はもちろん、観光で訪れた人も、充実した時間がもてる場所になりそうだ。

さらに2019年には、この地区が国交省が進めるスマートシティモデル事業の重点事業化促進プロジェクトに選定。2020年には全国の対象地区のなかでも牽引役となる先行モデルプロジェクトに格上げされ、まちづくりへのさらなる推進力となった。

スマートシティとは、ICT（情報通信技術）などの先進的技術を駆使した快適なまちのこと。荒尾市では太陽光や蓄電池を利用した「地産地消のエネルギー」を用い、移動にはスマホで迎車や行き先指定ができるオンデマンド相乗りEVタクシーなどの「モビリティ」を導入、鏡に映る姿で健康状態が判断できるなどの「ヘルスケア」で健康を守る…まさに、最先端の技術を生かした快適未来都市になる予定だ。

競馬場跡地からスマートシティに変貌する「あらお海陽スマートタウン」。

荒尾市総合政策課長の田川秀樹さんは「目指すのは、ウェルネスの上位概念とも言える、心身共に幸せな状態を示す『ウェルビーイング』をかけ合わせた『荒尾ウェルビーイングスマートシティ』です。URさんには、土地区画整理事業だけでなく、まちづくりの基本構想の支援や、プロジェクトに加わっていただいているJTB総研さんなどとのコーディネートにまで力になっていただきました。我々の限られた財源と人材でできないところを助けていただき、感謝しています」と話す。

「荒尾市は観光資源や豊かな自然に恵まれ、ポテンシャルの非常に高いまち。これからもUR全体で、まちづくりのお手伝いをしていきたい」とURの谷本も力を込める。

26年春には道の駅などが開業予定。住みたくなる、遊びに来たくなる、世界で誰も見たことのないまちに向けて、プロジェクトは着々と進んでいる。

街に、ルネッサンス
UR 都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます
［企画制作］新潮社